

〔研究ノート〕

# 「四国八十八ヶ所（2）」

The eighty-eight temples of shikoku island (2)

黒木賢一

KUROKI, Kenichi

『大阪経大論集』 第63巻第5号 抜刷  
*Osaka Keidai Ronshū* Vol. 63, No. 5 January 2013  
2013年1月 大阪経大会発行  
Edited by Osaka University of Economics Institute

〔研究ノート〕

## 「四国八十八ヶ所（2）」

黒木 賢 一

## I はじめに

「四国八十八ヶ所（1）」の論文では、徳島県の札所23ヶ寺についてまとめた。徳島の札所は、第1番霊山寺から始まり第23番薬王寺まで「発心の道場」として位置づけられている。平野の大地から山岳部へと、特に「遍路ころがし」と呼ばれる12番札所焼山寺や21番札所太龍寺への険しい山道は、遍路者の心の有りようが試されるイニシエーションの場としての遍路道があった。本稿で取り上げる高知県（土佐の国）は「修行の道場」と呼ばれており、太平洋の海岸線に沿った遍路道には第24番札所最御崎寺から第39番札所延光寺まで16ヶ所の霊場があり、それらの札所について述べる。

## II 高知県（土佐）の16ヶ寺

「発心の道場」である徳島県最後の第23番札所薬王寺を打ち終えると、JR牟岐線に沿った国道55号線を南下していく。交通機関を利用する遍路者は、薬王寺のある日和佐駅から乗り海部駅で阿佐海岸鉄道佐東線に変わり、徳島県最後の穴喰駅を通過すると、高知県に入り甲浦が終着駅である。そこからは、交通機関はバスを利用することになる。歩き遍路者は第23番札所薬王寺から室戸岬にある第24番札所最御崎寺まで、ひたすら歩く「行」が始まる。土佐は「修行の道場」といわれる由縁だ。図1の高知県（土佐）の16ヶ寺の地図を見て頂きたい。

室戸岬にある第24番札所最御崎寺の宿坊で泊まり、朝のお勤めに参加すると遍路者の自分を再認識する。最御崎寺からは次の目標は高知市内である。海岸線に沿った国道55を北に向かいながら、第25番札所津照寺、第26番札所金剛頂寺を打ち終え、さらに歩くと奈半利町に着く。この町には土佐くろしお鉄道御免奈半利線の終着駅がある。筆者のような区切り打ちをする遍路者は、この駅で打ち終えて高知市内に向かい関西に戻る。筆者の場合、次回2泊3日の予定で再開するならば、1日目は早朝6時過ぎの新幹線に新神戸駅から乗り岡山駅でおり、特急南風1号に乗り換え奈半利に着くのが午前11時前になる。その時間から歩き始めると、奈半利から10キロ歩き、第27番札所神峯寺を参拝し、3キロ先の唐浜で宿を取る。2日目は唐浜から35キロ歩き、第28番札所大日寺を参拝し近くの民宿へ泊まる。3日目は第29番札所国分寺、第30番札所善楽寺の16キロを歩き、JR土佐一宮駅から高知駅へ、そしてその日に関西に戻るというスケジュールになる。このような区切り打ち

(図1) 高知県(土佐)の16ヶ寺



『太陽 特集四国八十八ヶ所遍路の旅』より

を続けながら遍路の旅は続く。高知市内近くの第31番札所竹林寺から土佐市にある第36番札所青龍寺までは各札所の距離は長くはない。青龍寺から窪川にある第37番札所岩本寺の山沿いから海沿いに向かう。足摺岬にある第38番札所金剛福寺までは約100キロの距離である。海岸沿いの道を岬に向かってひたすら「歩く行」が続く。金剛福寺から最後の札所第39番延光寺までは幾つかのコースがあるが約60キロを歩くことになる。次ぎに、高知県(土佐)の霊場16の札所について詳しく述べる。

高知の最初の札所である第24番最御崎寺には、第23番薬王寺から海岸線に沿った国道55号線歩いて2～3日間の行程である。図1と図2を参照。弘法大師の『三教指帰さんこうしきま』に「土州室戸岬に勤念す、谷響おしまず、明星来影す」と記しているように、大師が修行した伝承の場である。海岸線に面した二つの洞窟がある。今はこの二つの洞窟は、海から離れているが、長い年月を経過する中で、海水面にあったものが隆起したといわれている。正面に向かって左が御蔵洞、右の鳥居が建っているのが神明洞である。約500メートル離れたところに一夜建立窟があり、求聞持堂が建てられている。

御蔵洞は「御蔵洞窟」と古くから呼ばれており、大師が来るまでは龍がいたと『四国遍礼霊場記』に記述されている。また修行するにはお供の人たちがおり、その従者は愛慢菩薩と愛語菩薩であり御蔵洞に祀られている。この従者は高野山まで従っていき、奥の院の嘗試地蔵あしむしぞうの原型になったという(五来, 2009, 藤田, 1996,)。弘法大師は厨房であり居間でもある御蔵洞で生活し、神明洞で真言を唱え禪定に入ったといわれている。図1は神明洞内から外の風景を筆者が撮った写真である。空と海だけしか見えない世界、大師はのちに「教海」から「空海」へと改名したことは、この風景を見れば容易に想像がつく。『四

(写真1) 神明洞内からみた風景

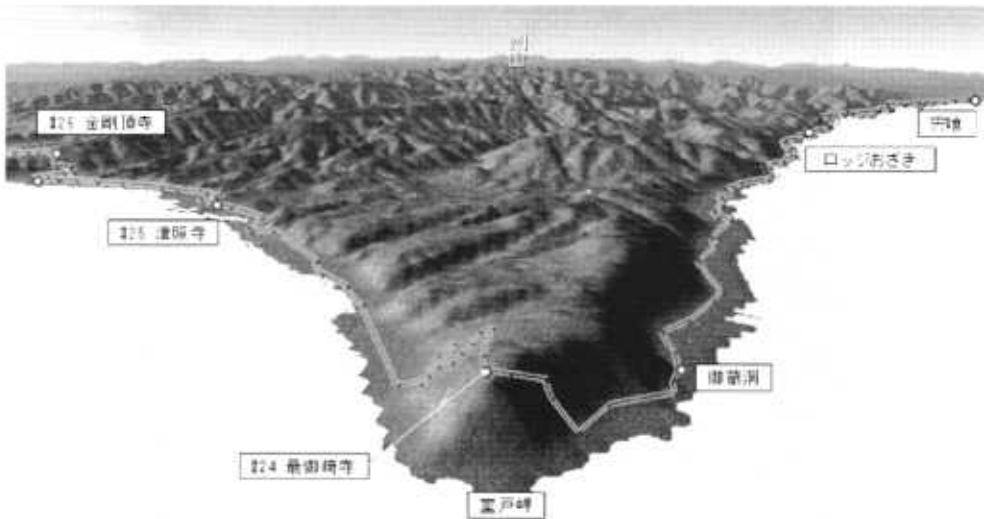


『国遍礼霊場記』には「此地は、むかし大師求聞持勤修あそばしける所なり。大師みづからかかせ給ふに、土佐室戸門の崎にをいて寝然として心に観ぜしかば、明星口に入、虚空蔵の光明照らし来て、菩薩の威を顕はし、仏法の無にを現すと」と述べられている。求聞持法とは、虚空菩薩の真言「オン・バサラ・アラタンノウ・ソワカ」を1日1万遍を100日かけて誦するきまりになっている。五来（2009）は求聞持の場所には①真言を繰ること、②行道をすること、③聖火を焚くことの三つの条件が必要であるという。また、最御崎寺は「火つ御崎寺」といわており、火を焚くところであり、つまり海を神様にする海洋宗修行の場所がこのあたりで、これを「辺地」といった。藤田（1996）は山岳宗教が起こる以前、海に囲まれた国に住む私たちの宗教意識は、海の方こうに注がれおり、海を拝みながらの修行の系譜が古来からあったという。沖縄・奄美には「ニライカナイ」という常世の国があると言われてきた。それは豊穰や生命の源であり、他界が海の方こうにあり、生者の魂も死者の魂はニライカナイより来て去っていき、祖霊が守護神へと生まれ変わる場所であるという信仰が今でも残されている。図2の室戸岬の遍路道を見てみると、土佐の修行の道場が海岸線に沿っており、各札所が海洋宗教とつながっていたことが分かるのではないだろうか。

最御崎寺は第26番札所の金剛頂寺が「西寺」と呼ぶのに対して、「東寺」と呼ばれている。境内に行くには700メートルの急な山道を登らなければならない。正面に本堂、左手に大師堂、右手に多宝塔が建っている。大同2年（807）、唐から帰国した大師が嵯峨天皇の勅願により、この地を再び訪ね、寺を建立し、虚空菩薩像を刻んで本尊にしたと言われている。御詠歌は「明星の出でぬる方の東寺 暗き迷いはなどかあるまじ」と詠われている。

第25番札所津照寺は室津港より商店街を入ったところにあり、「津寺」と呼ばれている。

(図2) 室戸岬の遍路道



(HP:「四国の道よ空よ海よ」より)

山門をくぐり、本堂に向かう長い石段を登っていくと、朱塗りの竜宮城をイメージさせる鐘樓門が建っており「仏の灯台」として親しまれている。石段を上がりきると本堂があり、太平洋を見下ろすことができる。大同2年に弘法大師が獺師の無事と大漁を祈願して延命地藏を刻み堂宇を建立したと言われている。この地藏菩薩には逸話があり、土佐の初代藩主の山内一豊が室戸沖で暴風雨にあい遭難しかけたとき、一人の僧が現れ舵をとり無事港に着くことができた。その僧の後をつけていくと、僧は津照寺に入ったので調べてみると地藏菩薩はずぶ濡れになっており、その僧が本尊の化身だったという話が残っている。

第26番札所金剛頂寺は「西寺」として知られ、最御崎寺の「東寺」に対峙している。御詠歌は「往生に望みをかくる極楽は月のかむく西寺の空」。御詠歌も最御崎寺の東寺と対になる内容になっている。山門を潜ると左手に大師堂、右手に鐘樓、正面の石段を登ったところに本堂が建つ。大同2年平城天皇の勅願によって、弘法大師が薬師如来の像を刻んで本尊とし堂宇を建立した。弘法大師がこの寺に最初に来たときの縁起譚がある。それは、この地に来た大師の行く手を多くの天狗（魔縁）が集り阻んだ。そこで大師は不動明王の火界呪を用いて天狗たちを追い払ったと言い伝えられている。大師堂の側面には大師と天狗の問答の伝説を描いたレリーフがかかっている。

第27番札所神峯寺は630メートルの神峯山頂付近にあり、勾配45度の坂道が1kmも続く土佐の難所寺である。急坂を上ると仁王門に着く。右隣に神峯神社の鳥居が建っている。石段を上ると左に本坊、右に鐘樓があり、長い階段がまだまだ続く。157段の石段を登ったところに本堂がある。縁起では、天照大神などの諸神が祀られていたが、行基が十一面観音像を刻んで本尊とし、神仏を合祀して開創した。その後、弘法大師が霊場に定めたという。五来（2009）は神峯寺は「聖火を焚く神の峯」という。彼によると、本堂の上に白

(写真2) 神峯寺門前



い大きな岩がある。月夜にはその岩がかなり光って見え、そこで火を焚けばなお光るがゆえ、龍灯のしかけがこの場所に行くによくわかるという。つまり、龍灯岩が燈明巖になり、聖火を焚く辺路行者がいて、海辺の民から「神の峯」と仰がれたのであろうと言う。

第28番札所大日寺は田園地帯の中にあり、山門を入り石段を上がると、地藏尊が並んでいる。正面にある本堂は瓦屋根の素朴な造である。左手には大師堂、右手には地藏菩薩を祀った六角堂がある。行基が開基し、本尊の大日如来は行基自らが刻んだとされている。200メートル離れた奥の院には大師がつめで彫ったといわれる「爪彫薬師」が祀られている。

第29番札所国分寺の仁王門をくぐると杉木立のなか一直線の石畳が美しい。柿葺き寄棟造の本堂は長宗我部元親が永禄元年（1558）に金堂として建立したもので、国の重要文化財に指定されている。寺の開基は行基で、自らが千手観音を刻んで本尊と伝えられる。聖武天皇が勅願所と定めた。縁起では、弘法大師がこの寺の厄除けを祈願して星供（星祭り）の秘法を修して、札所にしたといわれている。星供とは、堂の内に北斗七星や二十八宿などを配置した曼荼羅を掲げ、妙見菩薩を本尊として星に除災求福を祈る法会のことである。

第30番札所善楽寺大同年間（806～810）に弘法大師により、土佐神社の別当寺として開基された。山門や仁王門はなく、境内の奥にある本堂に向かって左に大師堂がたっており、左に建つ本坊の前には灯籠や庭石が置かれた日本庭園が印象的である。

第31番札所竹林寺は浦戸湾と市内が一望できる五台山（標高138メートル）の山頂にある。聖武天皇の勅願により行基が開基した。縁起によると、聖武天皇が唐の五台山で文殊菩薩に会う夢を見て、行基に五台山に似た場所を探させ寺を建立したのが竹林寺であると言われている。文殊菩薩を本尊にしているのは八十八ヶ寺のうちこの寺のみである。その後、弘法大師がこの地を訪れ堂宇を補修し札所にしたと伝えられ「中興の祖」と崇められ

ている。行基が開き、弘法大師が中興したという札所が19ヶ寺、番外寺13ヶ寺を含めると23ヶ寺になり、行基のあとを弘法大師が歩いている（藤田，1996）。境内に入ると左側に宝物堂があり庭の前を通り過ぎると仁王門がある。本堂は仁王門をくぐり、石段を上った右側にある。客殿にある庭園は室町時代の禅僧である夢窓疎石の作といわれている。

第32番札所禅師峰寺は標高80メートルの土佐湾を見渡せる峰山の頂にある。参道の石段は急でごつごつしており登るのを手すりが助けてくれる。途中に仁王門があり、参道の脇には巨岩が並び立ち、石段を登ると右手奥に本堂右手に大師堂がある。本堂の前には、芭蕉の「木がらしに岩吹きとがる杉間かな」という句碑が建っている。聖武天皇の勅願寺で行基が開基したと言われている。縁起によると峰山の姿が八葉の蓮台を思わせることから、弘法大師が山号を八葉山とし、寺号の「禅師」は、奈良時代山岳修行者や辺路修行者を示す言葉であった。弘法大師は土佐沖を航行する船舶の安全祈願するために、十一面観音菩薩を刻み本尊としたといわれている。御詠歌は「静かなるわがみなもとの禅師峰寺 浮かぶ心は法の早船」であり、ここまで遍路を続けてきて、自分のところを眺めてみれば、神仏を感じる自分に気づくのかもしれないとの意味である。

第33番札所雪溪寺は、高知市の南にある桂浜に近い町中にある。歩き遍路の多くは、禅師峰寺をでて6キロほど歩くと高知県営フェリー種崎渡場があり対岸の長浜渡場まで5分間のフェリーに乗る。このフェリーは一時間に一本往復しており市民のために無料で運行している。長浜渡場から300メートルぐらい歩けば雪溪寺に着く。境内に入ると本堂は平成16年に建てられ真新しい禅宗の建物である。左手には大師堂があり、頭をなでるとご利益があるという「寶頭ひんずるさん」が撫で仏として一際目を引く。延暦年間（782～806）に弘法大師が開基し「高福寺」と称していた。鎌倉時代に入り、仏師の運慶と長男の湛慶が訪れ、毘沙門天なども仏像を安置したことから「慶雲寺」と名を改めた。本尊の薬師如来は運慶晩年の作といわれ国の重要文化財である。戦国時代に入り、荒廃した寺を長宗我部元親の命を受けた月峰和尚が再興した。元親の死後は、その菩提寺として臨済宗の「雪溪寺」と改めた。明治の廃仏毀釈で一次廃寺となるという歴史がある。

第34番札所種間寺がある春野町は灌漑用水路があり田園の緑の中に佇んでいる。山門はなく、細長い境内の奥に本堂がある。聖徳太子が大阪の四天王寺を建てるために来日した百済の大工、仏師、画工などが仕事を終え、帰国途中に暴風雨に遭い近くの浜に漂着した。無事に帰国できるようにと薬師如来を安置したことから寺の始まりとされている。本尊の薬師如来は平安後期の作で国の重要文化財に指定されている。その後弘法大師が唐から持ち帰った五穀（米、麦、粟、黍、豆）の種を蒔いたことから「種間寺」の名がつけられたという。天曆年間（947～957）、村上天皇が藤原信家を勅使として遣わし、また江戸時代には土佐藩主の山内家の庇護を受け、寺は栄えたといわれている。また種間寺は安産祈願の寺として知られている。

第35番札所清滝寺は、ミカン畑に挟まれた山道を登り医王山の中腹にある。八丁坂という曲がりくねった急な参道が続く。仁王門の天井に描かれた龍の絵は必見である。仁王門を潜ると石段が続く。正面には唐破風の本堂と大師堂が並び、その間に厄除け薬師如来が

(写真3) 種間寺



目立つ。境内から眼下を望むと、仁淀川が流れる高岡平野の光景に圧倒されホットするのではないだろうか。行基が養老七年（727）に薬師如来を刻んで開基し、景山密院釋木寺と称したという。本尊の檜の薬師如来は平安後期の作で国の重要文化財として指定されている。その後、弘法大師が寺の山中で修行し、五穀豊穡を願い大地を金剛杖でつくると、清水が滝のようにあふれ出し鏡のような池が出来たという。そのことから「医王山鏡池院清滝寺」と山号、院号、寺号はこのような縁起から名付けられた。また清滝寺は弘法大師の十大弟子の一人である真如のゆかりの寺である。真如は平城天皇（在位806～809）の皇太子で高岳親王といい、薬子の変により位を廃され出家した。空海から密教を学び唐へ渡ったとされる。真如が生前に自らが作ったとされる「逆修塔」という墓がある。

第36番札所青龍寺の仁王門を潜ると急勾配の長い石段があり、左手前に恵果堂があり、石段の途中には恵果阿闍梨の墓がひっそりと佇んでいる。石段を登り切ると正面に本堂、右に大師堂と薬師堂が並んでいる。本堂の前に立っている波切不動像は長い髪を後ろで束ね右手に剣を携え睨みをきかしている。空海が帰国の途中に嵐にあい難破しかかった船を、波を切り暴風雨を鎮めたのがこの波切不動でありこの寺の本尊となっている。縁起によれば、この寺は、唐の恵果阿闍梨から密教を伝授された弘法大師は、独鈷杵（密教の法具）を東に向けて投げた。帰国した空海は、四国を巡錫中にこの地で松の枝に留まっていた独鈷杵を見つけたのがこの寺の建立の始まりと言われている。独鈷山の山号はこの縁起に由来し、寺号の青龍寺も唐の青龍寺にちなんだものである。五来（2009）によれば、恵果の墓が青龍寺にあることについて、縁起として長安の青龍寺を意識し、土佐の「青龍寺」になり、青龍寺に恵果阿闍梨が日本にやってきたという話しに変わっていく。このように縁起も変化していくことを指摘している。縁起の持つファンタジーの力により、その縁起をリアリティとしながら多くの人は生きる力を無意識的に得ていたのであろうか。



(写真4) 青龍寺山門



第37番札所岩本寺は窪川という町に建っている。五来(2009)によれば、岩本寺の成り立ちは複雑であったと次ぎのように述べている。それは、窪川から2キロ離れた山の麓に五社がある。岩本寺は五社の一つ東大宮の別院となったが、その前は福円満寺というお寺が五社の別当であった。福円満寺が別当だから、本来は福円満寺が三十七番札所にならなければならない。しかし、足摺岬と第36番札所の青龍寺からその間にあったのが岩本寺(或いは、岩本坊)で、福円満寺が衰えたときに、岩本寺に別当権が移ったと言われている。それゆえ、岩本寺は本来の札所ではないとして、御詠歌「六つの塵五つの社あらはして、ふかき仁位田の神だのみ」から、六つの塵とは煩惱のことで、六つの煩惱を五社が現れて「和合同塵」なることを表しているという。

第38番札所金剛福寺は四国最南端の足摺岬に建っており、岩本寺から100キロ程の距離で歩くと3日はかかる。足摺岬に近づくにつれて海岸線の道沿いを歩くことになる。観音さまの浄土にいちばん近いと寺とされ、「蹉跎山補陀落院金剛福寺」という。補陀落とは南海上にあり観世音菩薩が住む山をさす。仏教が日本に定着するにつれて常世が補陀落浄土になった。藤田(1996)によれば辺路修行者のありさまを探ってみると、四国霊場の基底に海洋宗教が潜んでおり、五来が語った真言を繰ること、行道をすること、聖火を焚くことの三つ条件を修行者は重視していたという。そして、一つ目は窟にこもり、二つ目は辺路修行者が常世の神へ捧げるべく焚いた聖火が「龍灯伝説」につながる。三つ目は、行道とは仏や堂の周辺を右回りに回ること、これが辺路修行者ひいては、山林修行者の間では岩の周囲巡る修行となったといい、岩にしがみつみなから行道することで、岩に神仏が降臨する場であるがゆえに、修行者と神とが一体になるという修行を行った。

第39番札所延光寺は「修行の道場」である土佐最後の札所である。神亀元年(724)に行基が自ら薬師如来を刻み開基したと言われている。仁王門をくぐると、右手に大きな赤

（写真5）土佐の海岸線



（写真6）赤亀の石像



亀の石像（写真6）がある。甲羅に梵鐘を背負い、口を真一文字に結び凛々しい表情である。赤海亀が竜宮から鐘を持ち帰って来たと伝えられおり、山号の赤亀山はこの縁起によるものである。この鐘（高さ33,3cm、口径23,5cm、口厚1,7cm）は延喜11年（911）の銘があり、県内最古の銅鐘であり国の重要文化財に指定されている。

本堂に向かって右には「目荒い井戸」がある。弘法大師がこの地に立ち寄ったとき、村人は水不足に困っていた。そこで大師が錫杖で地面を突くと清水が湧き出た。眼病にきく霊水とされ信仰を集めている。

### Ⅲ おわりに

土佐の16ヶ寺の各札所について調べてみると、海洋宗教に関わる海辺を巡る修行者の姿が見えてくる。山岳信仰以前に私たちの宗教意識は、海の向こうに注がれ、「ニライカナイ」という常世の国を拝んだ修行の系譜が古来からあった。四国最南端の足摺岬に建っている金剛福寺は、観音さまの浄土にいちばん近いとされ「補陀落」につながる世界観が作り上げられたのである。仏教が日本に定着するにつれて常世が補陀落浄土になった。第38番札所金剛福寺の御詠歌は「補陀落やここは岬の船の棹とるも捨つるも法の蹉跎山」である。

辺路修行の儀式の中に聖火を焚き海の神に捧げ、その場が「火ツ（の）御崎」で、その場所が今の最御崎寺であったこと。神峯寺は「聖火を焚く神の峯」といわれ、聖火を焚く辺路行者がおり、海辺の民から「神の峯」と仰がれた。海を神様にする海洋宗教行の場所を辺地といった。また、第39番札所延光寺には、赤海亀が竜宮から鐘を持ち帰って来たという伝説があり、甲羅に梵鐘を背負い大きな赤亀の石像がある。室津港に隣接した第25番札所津照寺は朱塗りの竜宮城をイメージさせる鐘楼門が建っていることなども一つの海にまつわるイメージ化である。また、土佐藩主の山内一豊が室戸沖で暴風雨にあい遭難しかけたが一人の僧が現れ舵をとり無事だったという。その僧が地蔵菩薩の化身だったという。このような歴史に組み込まれた約400キロある「修行の道場」は五来（2009）と藤田（1996）が眺めた補陀落浄土につながる海辺を巡る修行の地であった。今回は愛媛県（伊予の国）の「菩薩の道場」にある26ヶ所について述べる予定である。

#### <参考・引用文献>

- 藤田庄市（1996）：『四国八十八ヶ所』。学習研究社。  
 寂本（1698）：『四国遍礼霊場記』。伊予史談会編（1981）：『四国遍路記集伊予史談会双書第3集』。愛媛県教科図書株式会社。  
 加藤純龍・加藤誠一訳（2007）：『空海「三教指帰」』。角川学芸出版。  
 五来重（2009）：『四国遍路の寺（上）・（下）』。角川書店。（単行本は1996年初版）  
 宮崎忍勝（1977）：『澄禅四国遍路日記』。大東出版社。  
 宮崎建樹（監修）・岡崎禎広（写真）（2007）：『四国八十八ヶ所めぐり』。JTBパブリッシング。  
 中山和久（2004）：『巡礼・遍路がわかる事典』。日本実業出版社。  
 清水壽明（編集）（2000）：『太陽 特集四国八十八ヶ所遍路の旅』。平凡社。  
 須川真（編集人）（2005）：『週間四国八十八ヶ所の旅』。講談社。

#### <ホームページ（HP）資料>

四国の道よ空よ海よ【八十八ヶ所歩き遍路】  
<http://www5a.biglobe.ne.jp/~outfocus/eurail/pilgrim/henro-top.htm>

#### <写真資料>

- #1から#4は筆者の撮影。  
 #6は 須川真（編集）の講談社『週間四国八十八ヶ所の旅（3）』からの抜粋。